

第4回教育・文化ふく創造会議（意見概要）

「総合的な学力」の向上を目指して

提言 1 学校の「質」を高め、子どもたちの「総合的な学力」を伸ばす

「我が校の教育推進プラン」（スクールプラン）を作成・公表する

小松：「スクールプランを子どもや保護者、地域に公開すべき」とあるが、これは家庭・地域と連携・協力していくために作成・公開するもので、「連携の下で、学校の改善に結び付けていくもの」ということを明確に書くべき

三屋：福井県は「健康長寿」が特長。そのためには、子どもの頃から体を動かすことが大事で、学校でも積極的に取り組んでほしい。子どもは「よく遊び、よく学ぶ」が基本。運動生理学の分野では、体を動かすことで脳が活性化するという研究結果が出ており、座学で知識を詰め込むだけでは子どもらしさ、人間らしさは養成できない。各学校で「スクールプラン」を作る際には体力の向上や運動の重要性についても謳ってほしい

数年後の「目指すべき姿」（状態目標）を持って成果を挙げる

長谷：意識調査では、子どもたちの規範意識・職業意識を捉えるのも重要だが、一番大事なのは、学力向上の観点から、子どもたちが「何のために学ぶか」という意義とか意味を学年に相応して身に付けているかを把握することであり、その点を付け加えてほしい

黒木：「生徒自身が目標として・・・」の中の「第一志望校」という表現は意味がないのではないかと。むしろ、どのような道に進みたいかが重要であり、指標としては「志望の学部等に合格できたか」が大切であり、人数での評価をやめ当人の志望と学部のマッチングの割合などの評価を加味すべき。そうすれば、進学指導のあり方も変化していくと考える。その上で、進学後の状態もきちんと追跡して、進路指導に生かしていく方策を検討すべきだ

（黒木委員は、欠席のためメールにて意見提出）

小中連携・一貫教育の推進

小松：教育基本法の改正の中で、義務教育の目的や充実が明記された。小中連携・一貫教育は「義務教育全体のまとまりをつけるためにやる」という理由も、言葉として付け加えた方がよい

その他

小松：家庭・地域・学校ということでは書かれているが、教育委員会、行政がどうするということが全体的にあまり触れられていない。県民全体の立場から、行政が積極的に支援するというのをしっかり書いた方がいい

提言 2 信頼される親に、そして地域に ~ 家庭・地域の教育力を高める ~

子どもの人格形成は家庭教育から

吹矢：就学前の家庭でのしつけや生活習慣付けなどはとても大事であり、親への研修等を「義務化」するなど、積極的な方向で検討できないか。例えば、「できたら 講座に参加しましょう」というのではなく、「全部で何講座設けるので、何講座以上は受けましょう」というように具体的にやったらどうか

小松：親に研修会・公開講座を開催する前に、もっと相談とか支援の体制を充実すべきではないか。研修や講座に出る前に、「子育て悩んでいる人がもっと相談できる体制を充実すべき」ということを入れていった方がいい

岩下：「総合的な学力」を向上させると言った場合に、子どもたちが一人の人間として「自立して生き抜くための力」をつけるという話と、もう一つ、社会の一員として「将来、大人や親になって社会を支えていく力」をつけるという話があるのではないか。「提言 1」の「総合的な学力」の定義のところに、もう一つの目的を付け加えたらどうか

地域の力で学校を支える

吉岡：「福井型コミュニティ・スクール」について書かれているが、できれば具体例なども書き添えてあると、もっと説得力が出るのではないか

小松：親子が、安全で安心して遊べるような、あるいは触れ合えるような場をどこかでつくっていくべきではないか。こうした場が家庭や地域の教育力を高めるといのが提案としてあった方がいいのではないか

長谷：小松委員の意見を重視してほしいと思う。素案の記載だけだと、「上から下へ」と高圧的で、提言を読んだ親には受け入れられないと思う。例えば、公民館などを活用しながら、「子育てを楽しみながら、親が育つ」といった内容を、前段の部分に書き加えた方がよい

佐野：趣旨は理解できるが、「地域・学校協議会」と書くと、物々しい感じがする。果たして共感が得られるかどうか。趣旨は、共に考えながら子どもたちを育てていくということであり、地域、校区ごとの独自性でやればいいのではないか。学校、PTA、町内会などが、それぞれの立場で「何ができるか」から始めていけばいいのではないか

三屋：「地域の力で学校を支える」、「みんなで学校を支える」という趣旨は分かるが、学校は支えてもらうだけでいいのか。子どもたちの学びの場以外に、「学校は地域のためにどういう働きをするのか」とか「地域に役に立つのか」というのがないと、地域の人が、特に子どものいない人が支えようという気にならないと思う。これは「スクールプラン」の話になるのかもしれないが、学校と地域が双方向でやるということを考えていくべきだ

教員の指導力向上策

提言 3 「共同の学び」が指導力を高める

修正意見等なし

提言 4 「内」から「外」へ、校外研修のススメ

その他

三屋：研修の機会を創出するのはとても大事だと思うが、現場の先生が読むと「どこにそんな時間があるのだろう」と思うのではないか。そのために、「教員の数が増やせるのか」とかがないと（委員から笑い）。なかなか難しいとは思いますが。目一杯忙しいのに、「授業研究をやってください」、「郊外研修にも出てください」、「子どもたちも見てください」、「地域とも連携してください」というのでは、パンクすると思う。そのためには、教員の数を増やしていかなくてはいけないのではないかと素朴に思ってしまう

小松：「提言2」のコミュニティ・スクールの話にも関係するが、私が関わっている学校では、体力測定記録を測ったりするのは地域の人とか親が「学習サポーター」として手伝いをしたりしている。抽象的に「地域の人が支える」というのではなく、先生が忙しいから地域の人がボランティアで関わっていくというのを第二次提言で出していけば、「自分達が支えられるのは何か」というのが出てくると思う。キャリア教育、職業体験などもそうだ。こういったものは先生だけでやるのは大変だから、地域の人が学校の職場の改革に関わっている事例もあるので、「条件整備をやる」というのをどこかで書いておくのもいいと思う

提言 5 教育研究所の研修機能、学校サポート機能の強化

研修機能の強化（臨時任用講師研修の充実）

吉岡：「正規の教員と同様に『先生』であることには変わらない」という表現について、確かに子どもの立場では「先生」だが、親の立場からするとこの表現は強く当たるので、表現を工夫してほしい。やはり、臨時任用講師は臨時任用講師であり、その立場は正規の先生とは違うと思うので、明確に区別すべきである。臨時任用講師も成長して行ってほしいという意味では構わないが、表現をもうちょっと直してほしい

教育研究所等の在り方検討

長谷：表現はこれで十分だと思うが、教育研究所は老朽化してひどい状況である。あっさり創造会議の提言として「改築」、「新築」を謳ったらどうか（各委員から笑い）。ソフト面ばかりが強調されているような気がする。むしろ、「改築をやる中で、ソフト面を検討する」と言ってしまうのもいいのではないかと。「あのボロ屋で、うだうだやるのか」というイメージが湧く

- 小松：2段落目の冒頭の「しかし」でつながっているが、何がどうで「しかし」なのか明瞭でない。例えば、「モダンな研修をやりようと思っても、施設・設備が古くてできない」とかを具体的に書いて、これではハードを直さなくてはいけないというふうにもってあげればいい（各委員から笑い）。私も、全国各地の研修に講師として行くが、「こういう研修スタイルでやりたいが、施設の制約でできない」という県があった。せっかくの研修が成果を生まないというではいけない。やはり、ハード面も大事だと思う
- 佐野：私も最初の4行で「やりたい」という思いが出ているが、後半になると遠慮しているような気がする

提言 6 地元大学との連携で磨く資質・能力

福井大学教職大学院との連携で「理論」と「実践力」を高める

黒木：臨時任用講師の指導力向上の方策の一つとして、教職大学院を積極的に活用することを進めるべき

大学連携リーグで磨く教員の資質・能力

吹矢：体育関係では、大学の体育関係の教官が小・中学校に来て、体育の先生と一緒に授業方法についての事前計画を立てている例があった。国語や理科などの教科でも可能なのか。いろんな教科で大学から出張してもらえる時間的な余裕はあるのか。私の経験ではこうしたことがもっとできればいいと思う

祖田：忙しさは人による。県立大学の例でいうと、大学の宣伝も兼ねて、高校への出前講義などをやっている

吹矢：それは、小・中学校の先生と一緒に授業研究をやってくれるということではないということか。出て行ってモデル授業をやるという形なのか（祖田：そうだ）

小松：タイトルで、どうして「地元大学」と限定してしまうのか。大学以外に研究機関などもあるはず。福井に該当するものがあるかどうか分からないが、民間の企業の研究所などで、高校の教員が研修することだってあっていいと思う。私は、「地元大学・研究機関等との連携で・・・」とタイトルを変えてもいいのではないかと思う

提言 7 教員の意欲を高めるプラス思考の評価システム導入

複線型の教員評価・任用制度の導入

佐野：評価というのは難しい問題である。基準をつくって理想像に近づけていくのがいいのか。一定の評価はどこ企業でもあるが、プラス、マイナス両面がある。一生懸命やっている先生が、横を向いてしまうものにならないか心配である。学校の先生は、昔のように破天荒な先生もいていい。基本は持っているながらも、個性を持った多様な先生がいていいと思う。一つの基準をつくって、その基準にあった模範的な先生ばかりになってしまうのも寂しい

祖田：評価のシステムを入れないと、誰も納得しない時代になっている。今、県で「優秀教職員表彰制度」があるが、「優秀」というところで多様性を持たせ

ていく方法がある。大学でも評価が当たり前だが、大学の中でいつも問題になるのが評価である。「業務改善型評価方式」を導入したが、いずれにしても、子どもたちのための評価でなければならず、評価のあり方は慎重かつ絶えず改善していくことが大事だと思う。評価をしないでは済まされないので、システムを入れざるを得ない。「改良していく」という意味合いも記述の中で強めてほしい

三屋：評価は難しい。誰に評価してもらうかで変わってくる。自分で評価する部分はどうしても中庸的になってしまう、5段階だと3が中心なるように。また、校長だけとか、子どもたちだけが評価しようとする、それもいろいろ問題が出てくる

小松：国立教育政策研究所でも教員評価をやり始めたばかりで、全国の事例を集めようとしているところである。評価をするとすれば、マルチにやるのがいいと思う。自己評価を基準に子どもの評価、管理職の評価、保護者の評価を総合的にやる。一つの価値基準でやってはいけないと思う。素案には「複線型の」と書いてあり、この意味は、実際いろいろな教員がいるように、一色の教員ではないことが大事である。学校が社会のミニチュアということであれば、子どもから見たときに、いろんな個性を持った教員が学校の中にトータルでいたほうがいい

その他（教員感謝デー）

三屋：「教員感謝デー」がなぜ入っていないのか。私個人的には、とても受けていたのだから（全員から笑い）

佐野：創造会議の提言だし、いいと思うので入れてはどうか

小松：韓国ではやっていたが、現在、論議になっているということだ。かつては、教員への感謝の印として現金や物を贈っていたらしい。まずはこれを廃止。一方で、韓国でも教員に対する親の不信が強くなっていて、教員や教育委員会の側から言いにくくなっている状況もあるらしい

三屋：これは創造会議の提言であって、教育委員会の提言ではない。最近トイレには「きれいに使いましょう」ではなく「きれいに使っていただきありがとうございます」と書いてあって、実際に汚さなくなるという。「教員感謝デー」があるということで、先生は「自らがちゃんとしていないと批判を受けるぞ」ということで、逆に、自らを律するのではないか。「感謝をしてもらえよう、頑張ろう」という、いい効果が期待できる。年間365日が「こどもの日」みたいな状況の中で、1日ぐらい先生の「感謝デー」があってもいい。これまでの提言の内容は、教員にとってはある意味、非常に突っ込んだ厳しいものだと思うので、どこかでご褒美みたいなものがあってもいい

岩下：「複線型の・・・」という中で、こういうのもあってもいいと思う。

吹矢：PTAなどから盛り上がってきて感謝デーを設けようというのならいいが、どうかと思う。最近まで教育界にいたので、「もう少ししっかりしてほしいのに」といった批判が強い中で、親などから反発が来るのではないかと心配だ。子どもたちにとっては大事であり、いいことではあるが

吉岡：すごくいいと思う。ただ、「感謝デー」という表現がいいのか、また、「PTAにやりなさい」ということもできないと思うので、自然発生的にみんなができるような形になっていけばいい

祖田：私もいいと思うので、できるだけ盛り込む方向で。言い方、やり方は気配りをしながら、ということでしょうか

理科・数学教育の充実

提言 8 楽しみ、納得の理科・数学 ～子どもたち全員の基礎学力アップ～

その他

長谷：数学に関する文言が少なすぎるのではないか。理科ばかりが書いてある感じがするので、数学についても一つぐらい入れた方がいい。実際、小学5、6年ではかなりてこずっている

小松：日本の数学は純粋数学的であるが、海外の場合は、物理とかに近い部分が数学にあり、理論中心の使いにくい数学ではない。是非、福井では、そういうものを融合させたものをしてもらいたい。理科も物理・化学・生物・地学の4科目のバランスがとても大事だが、どうしても物理・化学中心で、生物・地学が弱くなってしまう。福井県の中で、生物・地学の分野でどういうものがあるかをイメージしながら、具体的に取組んでいってほしい

三屋：「数学的体験」とはどのような体験か。「数学的なものの考え方」とはどのような意味か。たぶん、子どもたちは、何故数学をやらなくてはいけないか分からないのだと思う。九九も電卓でできるのに、どうして一次関数、二次関数が必要なのか分からない。そういう点で、ドロップアウトする子も多いのでは。必要性が説明されていない

小松：確率とか統計などをもっとしっかりやってもいい。日常生活では、例えば、どのパチンコ台がよく出るかなどを考えてやっているのだから、日常生活の中でどのように利用され、生かされているかをもちょうと教えるべき。数学者はなかなか分かるように説明してくれないからいけない。また、情報系などと結びつけ、例えば「どのエレベータが先に来るか」というのを計算する応用数学的なものと結びつける方法もあると思う

三屋：私の友人が海外でギャンブルをして、勝って帰ってくる。「何故そんなことをするのか」と聞けば、「これは統計学だと。統計的にやれば負けられない」という。そういう具体の話聞けば、数学が必要だと納得する。そういうもので、日常生活に数学がどう生かされているのかを教える、といった文言を入れることはできないのか

祖田：数学的な考え方とか体験とかいう言葉があるが、もう少し砕いて分かりやすく伝えてほしい

提言 9 理数スペシャリストへの道を拓く ～応用力・実践力アップ～

大学進学のための理数学力の向上

佐野：高志高校だけでなく若狭高校とかも理数科があるようだが、理数科を設置した結果とういか、成果はどうか

長谷：若狭高校の理数科は、本当の理数科カリキュラムだが、こなせる生徒40人が確保できない。中学校の時に理数が得意だと思っても、高校に行ったら本当の理数をやると意外と文系だったとか。理数科へ行ってみたら本当に勉強したいのと違っていたということもある。結局、普通科で1年勉強して、向いている方向に行った方がいいという生徒が増えてきたのが理由だと思う

小松：それは全国的な傾向。私も高校改革を全国的に見ているが、残念ながら最初の頃の趣旨と今は全く違っている

黒木：SSH等で、「理数科」の生徒の理系への大学進学が明確になっており、成果を上げてきていると考える。「理数科」の見直しとは何を意味するのか。むしろ、福井県の特徴のある方向性として、積極的な支援が必要ではなか。その昔は、成績のよい人でも工業高校に進学したが、彼らが大学に進学して結構いい実績を残している。今は、工業高校へは進学するのは、大学受験からみても得策ではないが、「理数科」の設置を生かしていくことを大切にすべきではないか

ものづくり実践を通じたカリキュラムの充実

黒木：2段落目の「就職を希望する子どもたちが・・・不可欠です」の後に次のように加えてはどうか。「数学の教員の加配等により、数学基礎力の充実講座等を検討すべきです」

提言10 地域の科学力を結集 ～地域での体験で伸ばす「科学の芽」～

子どもたちが地域で学べる「ふくいサイエンス寺子屋」

佐野：地域の科学力と福井県のつながりを明らかにしてほしい。福井県が人口83万で全国的にも少ない。でも、持ち家が高く、健康長寿であり、事実豊かな県だ。それを支えているのは嶺北側のものづくり、嶺南のエネルギー関連産業。そういうものが両輪となって福井県の地域経済を支えている。これが、福井県の統計指標を押し上げている大きなバックグラウンド。そういう意味では、科学的なものづくりなどは、「福井で育った、教育を受けた、そういうものがバックグラウンドにある」ということも含めて位置付けた方が説得力がある

「サイエンス寺子屋」も枠を広げ、公教育を補完するような形でやればよい。美術とか音楽とか体育とかが提言の中に入らない。社会人になって、豊かな生活を送るためには、5教科以外がものすごく幸福につながる。そういうものが学校教育で前面に出せないのなら、寺子屋的なところで補強していく発想が必要だ。地域には、子どものために一生懸命やるというような人は必ず何人かいるし、教員OBもいる。具体的には長谷先生のようなやり方がいい。理数教育の枠を広げた寺子屋があっても良いと思う

祖田：今の話は、地域の力との関係でうまくまとめたらよい。5ページと20ページの地域の問題をどうふうにまとめるか工夫が必要である

岩下：全体的にアウトドアの要素が少ない。福井県は自然が非常に豊かで、その中で培われるものが実はサイエンスの基礎になるのではないか。それが環境などの問題につながっていくのも科学・数学領域のひとつの背景となる。そこを、寺子屋を室内的に見えないように、フィールドワークみたいな部分で反映できるものがあれば、福井県の最大の特徴になると思う。環境が非常に豊かとか、竹内先生も大森先生もそうだが、自然、フィールドというニュアンスを入れればよいのかもしれない

小松：全体に係るが、そういう文言を「総合的な学力」に入れたらいいと思う。せっかく「総合的な学力」の定義があるのだから

祖田：たいへん重要だと思う。1ページに何を記載するか。「福井県の地域性を存分に活かす」という意味が、歴史的、環境的側面も含めて入れられると、全体に係ってくるのでいいのではないか。同じことを2箇所書くわけにもいかないので工夫しながら

黒木：寺子屋の項の最後に、「特に、理科と数学は異なっており、数学的な考え方を身に付けるために、数学博物館的な恒常的な数学体験と数学的な考えを育てる講座などに留意した整備が望まれます」を追加してはどうか。その理由は、理科と数学は全く違い、数学的に考える力を育てることが必要。そのためには、数学的に考えるための手立てを準備することが必要で、理科は実験をしたり観察をしたりすることで興味・関心を育てることが出来るが、数学はそのようにはならない。観察するものの中に数学的な仕組みがあり、それを通して数学的に考えるという習慣を身につけることが重要だ。「サイエンス」という言葉の中に埋没させてしまえば、数学的な考えを身につけることが出来ない

高校生のための「ふくいサイエンススクール」

吉岡：地域の科学力という中で、原子力などエネルギー拠点化計画もあるので、エネルギーの話題も少し触れられるといいと思う

小松：エネルギーに関連して、地球温暖化の問題とか、環境問題とか、言葉としていろんなものを入れていくといいと思う。啓発の意味も含めて

長谷：16ページに環境・エネルギーの記述がある

(全体的な話に発展)

佐野：我々は、先人から引き継いだ歴史の中で育ってきているので、否定的ではなく肯定的に捉えて、福井県で生まれた恩恵を感謝し、誇りを持って成長し、地域に貢献するために学ぶという「何故学ぶのか」という目的を冒頭に書いた方がいい。最初の理念の部分で明記すべき。「これだけ恵まれていても、恵まれていない」と思っている人が多い。現状肯定の中からはいいものが生まれてくるので、こういった捉え方が大事である

長谷：冒頭のところで、福井県の教育や文化的な風土を高めていくといったメッセージを高々と謳ってもいいのではないか

小松：これまで先人が繋いできてくれたものを、君達が次につなげていくんだということをもうちょっと書いてもいいと思う

吹矢：前文のところに、「福井県の教育力は非常に高い。教員も頑張っており、更に高めていく」といったような文言が入ると、教員のやる気にもつながる

今後の検討課題（第二次提言に向けて）

課題 1 教員本来の職務を充実するための「学校マネジメント改革」

修正意見等なし

課題 2 「元気福井っ子笑顔プラン」を見直す

修正意見等なし

今後の修正作業については、座長一任（全員了承）

以 上